

説教 『片隅の平和が万物を動かす』 山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 57:18~19 / コロサイの信徒への手紙 1:19~20

「神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられた(コサイ 1:19~20)」。「万物の和解」とは、救済は宇宙的な規模なのか。せめて御子が打ち立てる「平和」なら、民族や国家の範囲で理解できるが、それでも小さな教会が働きかけられる相手としては大きすぎる。それでは「平和を唱えても無理だな」と諦めてしまうのか。

宇宙的な「天と地」の和解を語りながら、その焦点は「御子の十字架の血」と、ぐっと片隅の出来事に絞られる。この小さな、見落としそうな、世の片隅の出来事。権威や権力からはまるで遠く、民主主義のような大勢の支持もない。「十字架の血によって平和を打ち立てた(1:20)」あの時の出来事は、「見えない神の姿(1:15)」なのだ。ここにこそ万物の和解と、赦しと、世の平和に通ずる道筋がある。

「十字架の血」という片隅の出来事でありながら世に遍く「見えない神の姿」。これが信仰の足台であり、ここに私たちの目と耳を据える。キリスト者はこの足台から何を見、何を聞き、何をどう判断するのか。「食欲は偶像礼拝にほかならない(3:6)」。富を極端に偏らせる貪欲なグローバル商売。政治家はこの偶像を拝し、自衛隊を米軍予備隊として差し出し、原発も稼働させようとしている。だが「満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせた(1:19)」十字架の血によってすべては和解され、赦され、平和が打ち立てられている(1:20)。このように「見えない神の姿(1:15)」は描かれている。

こんな時代だからこそ私たちは、「古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされる(3:9~10)」ように生きる。力に力で抗い、数に数で対抗する「古い人」を脱ぎ捨て、「十字架の血によって平和を打ち立てた(1:20)」キリストの姿に倣う新しい人となる。そのためにパウロは勧める。「キリストの平和があなたがたの心を支配するように(3:15)」と。

私たちは、打ち立てられた「キリストの平和」を盾にとって、戦争を消滅させる見通しを大声でアピールするわけではない。ただ私たちが生きている世の片隅で、私たち自身の心がキリストの平和に満たされること(3:15)。そしてそれは、片隅の出来事ではあるけれども、キリストの平和であるがゆえに「地にあるものであれ、天にあるものであれ(1:20)」すべてに結びつけられていく。国家や民族、社会や文化の制約を受けず(3:11)、キリストは「すべてのもののうちにおられる(3:11)」からだ。

「平和、平和、遠くにいる者にも近くにいる者にも。わたしは彼をいやす、と主はいわれる(イザヤ 57:19)」。「いやす」とは治癒という謂だけではない。背信者を悔い改めさせ転換させるという意味もある(エレミヤ 3:22)。平和から遠く離れた政治家や武器商人は悔い改めるだろう。また平和の近くにいる私たちも、「打ち立てられている平和(コサイ 1:20)」に疑心暗鬼なことを悔い改める。遠くの者も近くの者も、共に疲れ、脅えている。だから神は約束される。「わたしは彼をいやし、休ませ、慰めをもって彼を回復させよう(イザヤ 57:18)」。遠くの者も近くの者も、愛を得て悔い改め、赦されて回復するのだ。



【おまけのひとこと】

小さな家と慎ましい庭 そのくらいの小宇宙なら 働き甲斐もあるだろう もっと小さくてもよい
もっと大きくてもよい 気をまわして自己規制せぬように キリストの平和は遍く満ちているから